



## ～日本の健康・世界の健康～

### ● 保健医療現場における日本語に制限のある人びととのコミュニケーション ●

名古屋市立大学大学院看護学研究科 国際保健看護学 教授 樋口 倫代

日本で生活する海外ルーツの人びとは近年ますます増えています。海外ルーツの人びとの背景はさまざま、[在留外国人]とかならずしも一致はしませんが、2022年6月末の政府統計による在留外国人数は約300万人です。数だけではなく、出身国や在留資格（つまりは日本にいる目的や理由）も多様化しているのが最近の特徴です。

日本で生活する海外ルーツの人びと（以下外国人住民）が保健医療にアクセスしようとする時、3つの壁があることが指摘されてきました。「言葉の壁」「制度の壁」「心の壁」です。「制度の壁」としては公的保険への加入がありました。2012年以降は、3ヶ月以上在留する人が職場の健康保険などでカバーされていない場合、国民健康保険に加入することになっています。しかし、公的保険の制度がわかりにくいなどの壁は残っています。「心の壁」には差別や差別されるかもしれないという不安も含まれます。また、保健医療という生死に関わる場面では、文化的、宗教的背景にもとづく習慣や価値観がとても重要になってくるのですが、保健医療の提供側に理解されないことも壁となります。

他の壁にも大いに影響するのが「言葉の壁」です。多様な背景を持つ外国人住民は、言葉についてもさまざまです。日本語が母語の人、母語でなくても問題なく日本語ができる人もいる一方、来日後間もなかったり、日本滞在が長くても日常的に日本語以外の言葉を使っていたりして、日本語があまりできない人もいます。保健医療現場において、日本語に制限のある外国人住民とのコミュニケーションにはどのような選択肢があるのでしょうか。

理想的には医療通訳者の利用です。医療通訳者は会議などでの通訳者とは異なり、医療倫理なども理解した上で、言葉の媒介者、文化の仲介者として医療従事者と患者とのコミュニケーションを支援する人です。対面、電話、オンライン（チャットやオンライン通話など）などの手段があります。医療通訳者を職員として配置している病院もありますが多くはありません。あいち医療通訳システム（AiMIS）のような公的な医療通訳サービスは、医療機関からの依頼によって利用するものが多いです。個人で依頼できるNPOやビジネススペースの医療通訳もあります。いずれにしても、通訳者の数にも、対応可能な言語にも限りがあります。

多くの場合、実際に頼られているのは、家族、友人、職場の人などによる「アドホック通訳」です。アドホック通訳とは通訳の訓練を受けていない人による臨時的通訳です。現場では、患者に「日本語ができる人を連れてきて下さい。」と要求することがままあるようですが、これにはさまざまな問題があります。まず、通訳の質の問題です。医療通訳者には、医療用語だけではなく、医療倫理の知識も必要です。内容によ

ては、家族や友人でも知られたくないこともあるでしょう。特にDVや職場のハラスメントに関わる受診の場合は、パートナーや職場の人には絶対知られたくないはず。また、子どもが親より早く日本語を習得して親の通訳を担うことはめずらしくありませんが、親の深刻な病気を知ってしまうことや、長時間の通訳のストレスなどによる心理的負担が指摘されています。親の受診のために学校を休むなど、子どもの人権に関わるケースも報告されているようです。

共通語としての英語の使用はどうか。英語が世界的な共通語であることは多くの人が認めるところで、医学分野では特にそうです。英語ができる日本人医療従事者はそれなりの数います。しかし、医学英語はできても、英語でのコミュニケーションが必ずしも得意ではないために、難しい用語を使ってしまうがちとなり、患者はよくわからないということもあるようです。また、在留外国人の出身国として人数の多いトップ10のうち、英語が公用語なのは4位のフィリピンと8位のアメリカだけです。多くの在留外国人にとって、英語はそれほど楽なコミュニケーション手段とは言えません。

最近注目されているのが共通語としての日本語です。1995年の阪神・淡路大震災時、外国人住民の人口に対する死傷者割合が日本人の死傷者割合より高かったことを反省として、日本語が十分理解できない人たちが災害発生時に適切な行動がとれるよう、「やさしい日本語」が考え出されました。現在は、防災分野だけではなく、ニュースや行政サービス、国際交流などでも使われています。防災関係者に比べて、医療従事者の間では「やさしい日本語」の認知度はまだ高くないようですが、教育に取り入れる医療従事者養成校や研修を行う病院も出てきました。

一方、近年の人工知能技術の発達により、自動翻訳の精度が非常に高くなっており、無料アプリでも実用性のある音声翻訳が提供されるようになってきています。しかし、自動運転車による事故や違反の責任の所在について法的整備がされていないのと同様の課題があるという意見や、オンラインで使用する翻訳アプリの使用履歴はサーバーに記録されるので、個人情報を含む医療通訳には不適切という意見もあります。自動翻訳は、使う側の工夫も必要ようです。あまり気遣いなく話してしまう場合より、主語と述語を明確にして、1文ごとを簡潔にした「やさしい日本語」で話しかける方がわかりやすい翻訳が出ます。

重要な状況ではプロの医療通訳者に依頼しつつ、「やさしい日本語」と自動翻訳の併用を軸に、必要の際は共通語としての英語も補助的に使うことで、日本語に制限のある人びとの「言葉の壁」を低くしていく努力が必要と考えます。